

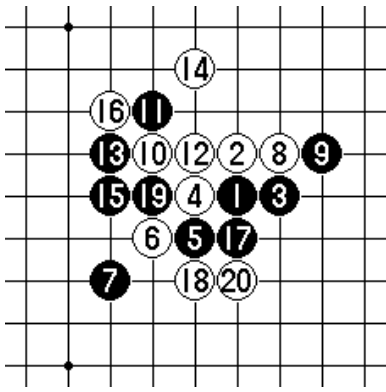
# 連珠っておもしろい

## 九段 河村典彦

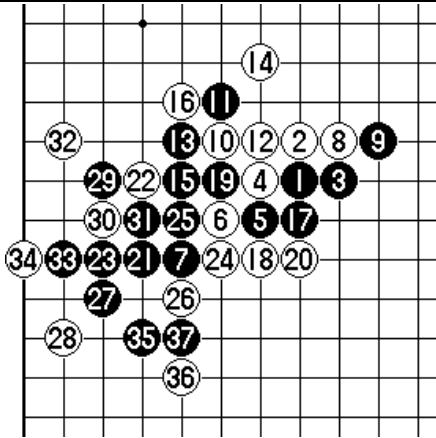
### ● 第75回 ●

### ■ 雲月と雨月

今年の世界戦から名人戦の流行と言えば、雲月雨月の松月残月花月水月山月丘月共通形（何と8珠型）だった。挑戦手合いでも出たのでご存知の方も多いだろう。雲月と雨月はこれまでどちらかと言えば雲月が選ばれることが多いが（これは偏見か？）、今回は雨月が主役だった。その理由を述べてみよう。

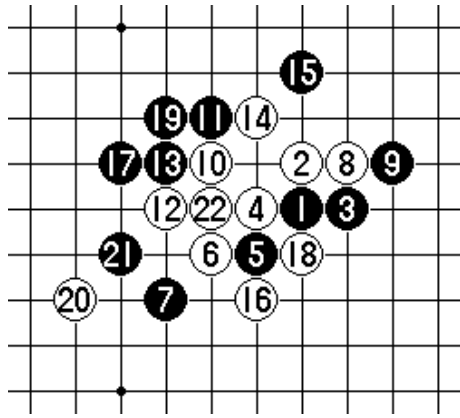


黒5と打って白6と引き、黒7から止めて以下黒11までが一貫形で、白12、14までが世界戦でよく打たれた。ここで黒15に白16とノリ手で止めたのがA級リーグの松浦・河村戦だが、実は雨月だとこれが打てない。その訳は黒21から追い詰めたからである。

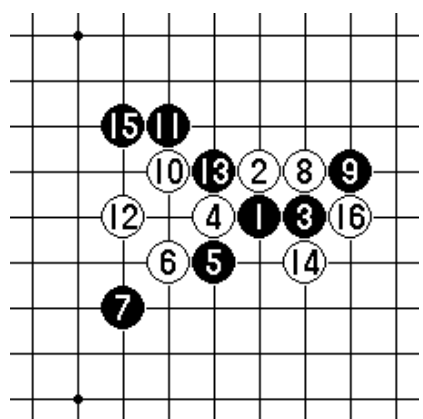


黒21と含み手を打つのが妙手で、白22が最善だが以下狭い所で黒勝ちが出る。中山君はすらすらと並べていたので研究済みだったようだ。実戦では黒21を22に

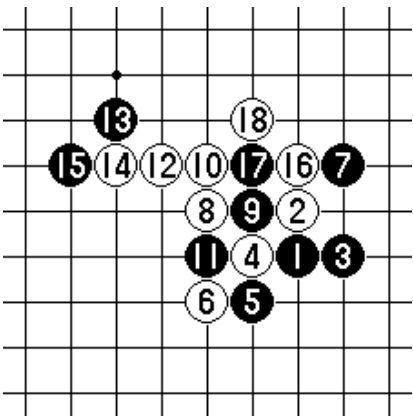
打ったが、これでは白に反撃があつて黒勝ちにはならない。これが雲月からスタートすると、盤端が近くてこの勝ちがない。なのでスタートが雨月から始まることが多いのである。白16に止められないと少々不満が残る。そこで白はいろいろ変化するようになったが、名人位決定戦ではあの中村名人が白12で変化した。



挑戦手合いでは白16で変わったが、図のように三重三々禁にする手もあった。

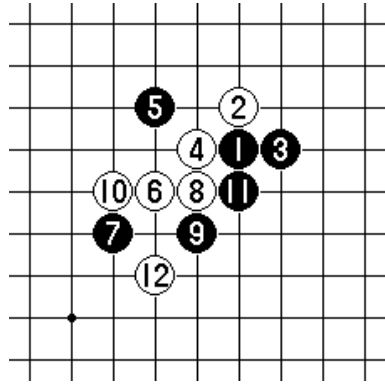


長谷川九段の失着であつけなく白勝ちになったが、もし黒13、15と打たれたら白はどう対応したのだろうか。興味深い変化である。そもそも、黒7は逆止め



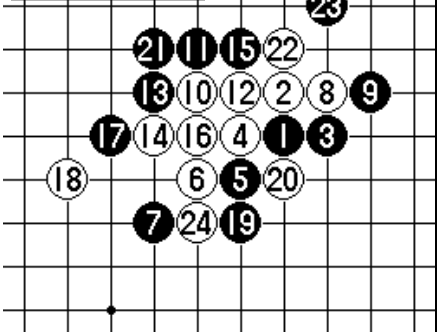
が研究されていたが、図のように打たれて白勝ちが発見され、打たれなくなっていたのだが、黒7を反対に止める手がここにきて見直されてきた訳である。

ただし、雨月からだと、黒5と打った時に左辺が雲月と比べて一路広くなる。例えば図のように打った時は左辺は白の勢力になるので、黒としては好ましくないので。だから黒5を打つつもりなら、スタートは雲月の方が良い。



冒頭の図に戻り、白14では次図のように組む手を打つ場合も多かった。

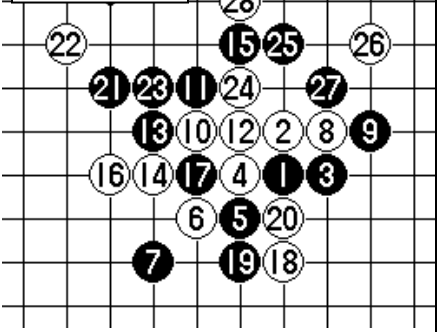
黒：長谷川  
白：大角



代表的な一局が長谷川、大角戦で、長谷川九段が黒15と単純に押さえたため、白16と打たれて黒の防ぎがなくなった。挑戦手合いでも白12の変化にあっけなく敗れている所を見ると、初見での対応力が長谷川九段の課題だろう。(一応世界戦でも打たれていたので情報収集が足りなかったかな?)

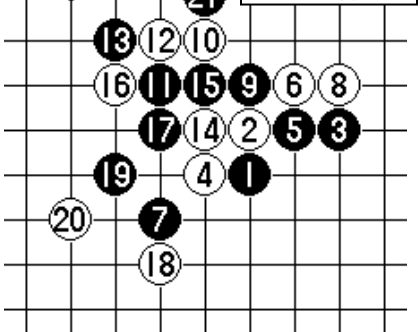
黒15からは次図の大角、岡部のように黒15、17と引く手が世界戦で打たれており、これで互角のようだ。大角、岡部戦はこの後満局

黒：大角  
白：岡部

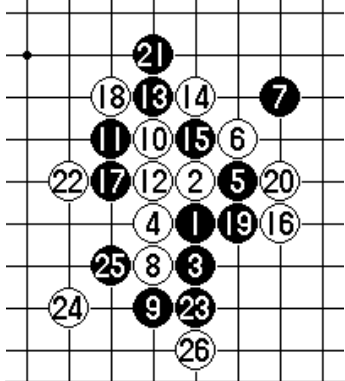


A級リーグでは、終盤になると情報が整理されてきたり、自分の研究が進んだりして序盤からいろいろな駆け引きが見られるようになってきている。

黒：小山  
白：飯尾



今度は松月から始まっている。かようにいろんな珠型から派生するのがこの作戦の特徴でもある。



黒：飯尾 白：長谷川

なつた。残月からこの形になったのが駆け引きの後を感じさせる。独特の感覚を持つ小山君だが、この形でも黒9と変化した。白10と打たれて若干白が有利とは思うが、そんなことは気にもせず、黒21まで堂々の打ちまわした。以下満局となった。最初は敗れた長谷川九段だが、すぐに応用して今度は白番で勝っている。かけられた作戦を自分の物にするのも重要な事である。